

2019年度 審判員の目標

『コンタクトプレーを正しく見極める』

～モダンハンドボールの考え方から～

スライド1

2019年度 審判員の目標

2019年度の審判員の目標は、大きく分けて2つです。

1つは、福島審判委員長から示された『審判員の心得 10箇条』です。

もう1つが、昨年度より継続の『コンタクトプレーを正しく見極める』ことです。

この『コンタクトプレーを正しく見極める』ことについては、強化委員会・指導委員会・審判委員会からなる「強化・育成戦略委員会」を経て、共通理解のもと、提案している内容です。

昨年12月に熊本の女子アジア選手権に合わせ開催された、『コーチ・レフェリーシンポジウム 2018』においても、このテーマについて、ディスカッションしたところです。

スライド2

テーマ：『コンタクトプレーを正しく見極める』 ～モダンハンドボールの考え方から～

ここでは、2016年のリオ・オリンピック以降、IHF（国際ハンドボール連盟）が提唱しているモダンハンドボールの考え方を基にした、『コンタクトプレーを正しく見極める』ことについて、改めて、確認したいと思います。

スライド3

モダンハンドボール

近年のハンドボール競技の特徴として、「激しいコンタクト」、「スピーディーなゲーム展開」といったことが挙げられます。

まさに、観衆を魅了するポイントとして、IHFがリオ・オリンピック以降、さらに強調し大切にしている『モダンハンドボールのコンセプト』です。

モダンハンドボールをコート上で表現するために、我々レフェリーサイドの課題は、「ハードプレーとラフプレーの見極め」であると考えています。

2019年、2020年、そしてその先を見据えたとき、日本のプレーヤーが国際大会で活躍するために、我々レフェリーサイドがゲームを理解し、整理、解決していかなければならない大きなポイントだと考えています。

スライド4

コンタクトプレーを正しく見極めるために

レフェリーがハードプレーとラフプレーを見極める根拠は、競技規則第8条「相手に対する動作」です。

これは、攻撃側、防御側の双方にあてはまります。

レフェリーは、「身体接触の際、両者の位置関係」はどうであったのか、また、違反はあったがその「違反を受けたプレーヤーへの影響」はどうであったのかを、正しく見極めなければならず、競技規則にはその判断基準について明記されています。

スライド5

競技規則 8 : 1 (a) ~ (c)

スライド6

ハードプレーとラフプレーの見極め（防御プレーヤーの位置と防御行為）

そして、ここでは、競技規則8 : 1に記載されている「許される行為」を踏まえ、【ハードプレー】を次のように定義し、進めていきたいと思えます。

防御行為におけるハードプレーとは、防御側プレーヤーが

◆攻撃側プレーヤーの正面に位置を取っていること。

そして、例えば、曲げた腕を使うといった、

◆競技規則8 : 1の状況であること。

その上で、例えば、ジャンプしている相手に対しても、

◆相手の安全面を守ること

を前提とした防御行為、ボディーコンタクトが保障されます。

この状況の中、例えプレーヤー同士の接触の度合いが強かったとしても、レフェリーは、これを「ハードプレー」として認めていこうという考え方です。

★アニメーションあり

キーワードは、『正面・曲げた腕・相手の安全』です。

スライド7

良いディフェンスの例（正面・曲げた腕・ボールに対してプレーする）

それでは、ここで『正しいコンタクトの例』を紹介します。

D Fプレーヤーは、曲げた腕を使いながら、相手正面に入り、ついていつている。

スライド8

オフエンシブファールの例（先に位置を取る・正面）

D Fはボールを持ったO Fプレーヤーに対して、先に正面に位置を取っている。

レフェリーの判定は正しい。

オフエンシブファール。

相手チームのフリースロー。

スライド9

正しいディフェンスの例

D Fは相手に対して、正面からのコンタクトを試みている。

決して罰則を適用してはならない。

ピボットも明らかな得点チャンスを得ているわけでもないので、O Fチームのフリースロー。

それ以外の判定はない。

スライド10

ハードプレーとラフプレーの見極め（レフェリングの際のポイント）

それでは、ハードプレーとラフプレーの見極めの際に事実判定の根拠となるものについて、整理したいと思います。

大切な判断基準となるのは、

- ①シュートを打つプレーヤーのボディーコントロールは失われたかどうか
- ②その行為がプレーヤーへ与えた影響はどうであったか
- ③その接触は、ボールに対するプレーであったかどうか

の大きく3つです。

スライド11

① ボディークントロール ⇒ シュートを打ち切ったかどうか

まず、判断基準として持つておかなければならないのが、

①シュートを打つプレイヤーのボディークントロールは失われたかどうかです。

つまり、「シュートを打ち切ったかどうか」ということです。

これは、IHFが求めるモダンハンドボールを表現するためにも大切になってくるものです。

例え、DFとの接触があったとしても、シューターが、ボディークントロールを失わずにシュートを「打ち切っている」ならば、その結果、例えシュートを外したとしても、7mスローの判定や、罰則の適用などにより、競技を中断する必要はありません。

レフェリーは、ハンドボールの醍醐味であるスピーディーな「ゲーム展開を重視」し、違反があったかもしれないプレーであっても、そのプレイヤーがボディークントロールを失っていないのであれば、「安易に競技を中断してはならない」という事です。

これは、レフェリーとして「ハンドボールの面白さを表現できるかどうか」のポイントとなります。

スライド12

② プレーヤーへの影響 どの罰則を適用するかについての判断基準（8：3）

そして、大切な判断基準 ②プレーヤーへの影響について、

競技規則8の3には、「どの罰則を適用するかの判断基準」が、明文化されています。

★アニメーションあり

その中でも、「d) 違反行為の影響」を正しく観察することが、コンタクトプレーを見極める際の重要なポイントとなります。

先の「ボディークントロール」での説明にもつながりますが、DFとの接触がある中でもプレーが継続できた、もしくはシュートが打っている状況で、しかもすぐに立ち上がれている状況であるならば、競技を中断する必要はありません。

レフェリーは、「違反があったから」ではなく、違反はあったが、それは「影響があったかどうか」という事実判定を根拠として、適切に運用していく必要があります。

スライド13

DFのコンタクトによるシューターへの影響を見極める

シューターは、最終的にDFのコンタクトなしにシュートを打ち切っている。

ゴールイン。

違反を受けたプレーヤーへの影響もないため、罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。

罰則も不要。

スライド14

視点 ① DFの位置 ② OFの影響 ③ シュートへの影響

DFは積極的に前へ動きながらコンタクトを試みている。

決してオフエンシブファールにはいけない。

違反を受けたプレーヤーへの影響もないため、罰則は不要。

ゴールイン。

シュートを外したとしても、そのまま継続。

スライド15

ピボットプレーの場合

ピボットがボールをキャッチし時、DFはピボットへのコンタクトを止めたため、ピボットは、ボディーコントロールを失わずにシュートを打ち切った。

ゴールイン。

罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。

罰則も不要。

スライド16

③ ボールに対するプレー

そして、大切な判断基準 ③ボールに対するプレーかどうかは、ハードプレーかラフプレーかを見極めるキーとなります。

もし、横や後ろからボールを対象とせず不利な位置から接触を試みたならば、競技規則8:2、8:3の判断基準を基に、「ラフプレー」として判定しなければなりません。

スライド17

DFのコンタクト（正しい位置ではない）シューターへの影響

ボディコントロールを失わずにシュートを打ち切っている。

ゴールイン。

罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。

罰則も不要。

★アニメーションあり

ただし、このシーンに関して、カテゴリーによっては、影響があることも、付け加えておきます。

スライド18

DFのコンタクト（正しい位置ではない）シューターへの影響

シューターへのコンタクトの影響はなく、ボディコントロールを失わずにシュートを打ち切っている。

ゴールイン。

罰則は不要。

シュートを外したとしても、そのまま継続。

罰則も不要。

★アニメーションあり

ただし、このシーンに関しても、カテゴリーによっては、影響があることも、付け加えておきます。

スライド19

即座に2分間退場とすべき違反行為

影響を見るといっても、開始直後から、2分間退場以上の判定をする可能性も十分にありうる。

そのためレフェリーは、8：4、8：5、8：6、8：8、8：9、8：10と、準備をしておかなければならない。

スライド20

即座に2分間退場とすべき違反行為

試合開始直後であっても、後方からのプッシングには、即座に2分間退場を判定しなければならない（警告では不十分）。

シューターは明らかな得点チャンスを妨害されたため、7mスローを判定する必要がある。

スライド21

即座に2分間退場とすべき違反行為

相手を背後から捕まえ続けているため、即座に2分間退場とする。

スライド22

即座に2分間退場とすべき違反行為

相手を背後から捕まえ続け、さらに引き倒したため、レフェリーは即座に2分間退場とすべきである。

スライド23

コンタクトプレーを正しく見極めるために

ここまで「ハードプレーとラフプレーの見極め」ということで映像を見ながら整理してきましたが、ハンドボール競技は、いわば「戦いの競技」と言え、その中では「コンタクトの発生は必然的である」と言えます。

☆アニメーションあり

2019年、2020年、そしてその先を見据えたとき、ハードなコンタクトプレーは、指導部門、強化部門において「世界で戦っていくために必要不可欠なもの」であると捉えています。

スライド24

これからのレフェリーの役割

指導側、強化側のこのような流れの中で、我々レフェリーのこれからの役割として、

◆世界の流れである「スピーディーな展開」を目指し、決して独りよがりの笛ではなく、またゲームを作るのではなく「協力する側」として競技規則を適用していくことが求められると考えます。

また、

◆どの罰則を適用するか判断基準として、①位置②部位③程度④影響の4つを挙げている競技規則8：3において、特に「影響」を見極めて判定をすることが大切となります。

これは、不必要な笛を減らしていくことにもつながり、「スピーディーなゲーム展開」へとつなげていくことができます。

◆そしてこれらを行うためには、プレーを「正確に観察できる」良い位置を探し、しっかりと動くことが求められます。

「動く」ことを怠り位置取りが悪くなってしまうと、段階罰、アドバンテージの判定などレフェリーの課題の多くに起因する原因に繋がってしまいます。

そのため、レフェリーは、動くための運動量が求められます。

しかし、「動く」だけを求めるのではなく、最終局面までの「過程を見ること」、シュートモーションに入った時などは「止まって観察すること」も、我々レフェリーには必要となります。

スライド25

これからのレフェリーの役割 ～前半のうちに基準（許容範囲）を示す～

また、前半のうちに

例えば、攻撃展開に合わせて視線を送りながら身振り手振りで注意を促すといった

「インフォメーション」や「ボディーランゲージ」を用いたり、

競技規則に掲載されているジェスチャーを用いて「段階的罰則」を適用するなど様々な手段で、プレーヤーやチームに基準を伝えていくことが、ただ単に罰則を与えて示すよりも、はるかに有効的です。

その意味は、後半に罰則を適用する必要がない・・・つまり、「いかに6対6でハンドボールをさせるか」ということにつながるといえます。

60分のゲームの中で、起こりうる数々の違反行為をさせないように、レフェリーから積極的にプレーヤーへコンタクトを取ることで、「今後、重大な違反に発展しかねないプレー」を減らしていくことができます。しかし、そこには、もちろん2分間以上の「罰則を適用する準備」をしておかなければいけません。

取らなければいけない違反への線引きは当然必要となり、それに対しては、機械的に判定しなければならず、レフェリーは、競技規則8：3および8：4の基準に従い、適切に運用していかなければなりません。

スライド26

これからのレフェリーの役割 ～一試合を通して～

【一試合を通して】

これを踏まえ、我々レフェリーは、60分のゲームの中で、「起きた現象」だけでなく、「プレーの質」を見て判定することで、「良いプレーを保証し、悪いプレーを排除」していかなければなりません。

今日、ここで挙げてきた映像でも、皆が少なからず感じていただいたと思いますが、

●プレーの継続●フリースロー●7mT●ターンオーバー●罰則の適用など

ハードプレーにもラフプレーにもなりうるコンタクトプレーの中で、レフェリーは、常に「全ての可能性」について準備をしつつも、違反を受けたプレーヤーへの影響を見極め、罰則を適用するかどうかの判断をし、競技規則に従い、適切に運用していかなければなりません。

※従来通り、「立ち上がりの基準作りを明確にすること」「いつでも罰則を出せる準備をすること」に加え、「影響を見極める」ことが追加となっているだけのこと。

スライド27

レフェリーの使命

チーム・プレーヤーは日々、トレーニングをしています。

そのため、我々レフェリーの使命はチームが行なってきた「トレーニングの成果を存分に発揮させること」です。

この使命を果たすために、我々は、身体的、精神的、競技規則の理解、映像分析、etc.大会やゲームに臨むため、そして、大会期間中やゲーム直前においても...日々、そして常に、「準備」を怠ってはいけません。

スライド28

ハンドボールの発展のために皆でトレーニングを積む

そして、Team JAPANとして、レフェリー、指導、強化、(もちろん選手も)が一体となり、「スピードハンドボール」「パワーハンドボール」の追求と発展を求め、皆でトレーニングを積むことは、2019年、2020年、そしてその先を考えたとき、必要不可欠となります。

チームは、罰則を取ってもらうためにプレーをするのではなく、あくまで「コンタクトに強い」、「コンタクトが当たり前」の世界(それがもちろん、日本人同士の戦いとなる国内大会においても)と戦っていくためのプレーヤー、チーム作りを目指した、強化、育成を行なっています。

その流れの中で、我々レフェリーサイドは、お互いが鍛えぬいていることを前提に

☆アニメーションあり

競技規則の運用を行い、

「ハードプレーとラフプレーの整理」をし、「コンタクトプレーを正しく見極め」て吹笛することを目指し、「審判員の心得 10箇条」と共に2019年度の目標とします。